第四章　円融三諦と刹那生滅時間

道元の重要な教義である、仏向上・証上妙修・刹那生滅・前後際断等々の基本観点と、円融三諦について、教義上共通しているのかは重要な問題である。これらの教義と一体なのが、私は、那生滅の時間論で有ると考えている。それでは、刹那生滅論と有時の時間で明らかにしてみよう。

禅師は、刹那生滅の教えを、十二巻本第一『出家功徳』でこのように説かれている。

「しるべし、今生の人身は、四大五蘊、因縁和合してかりになせり、八苦つねにあり。いはむや刹那々々に生滅さらにとどまらず、いはんや一弾指のあひだに六十五の刹那生滅すといへども、みずからくらきによりて、いまだしらざるなり。すべて一日夜があいだに、六十四億九万九千九百八十の刹那ありて五蘊生滅すといへども、しらざるなり。あわれむべし、われ生滅すといへども、みずからしらざること」

そして、刹那生滅の教えは、ただ釈尊と舎利弗だけが覚知するだけで、他の祖師たちは知るはずもないとも説かれている。禅師によると、我らが身心は四大(地・水・火・風)五蘊(色・受・想・行・識)の四大と五蘊の因縁和合の積集に縁って、生命は保持されていることを明らかにする。

其れだけではなく、人生の八つの苦しみである、生苦(生まれる苦しみ)・老苦(老いる苦しみ)・病苦(病にかかる苦しみ)・死苦(死ぬ苦しみ)、怨憎会苦(怨み憎む者との対面)・愛別離苦(愛する者との離別)・所求不得苦(物的欲望の満たされぬ苦悩)・五盛陰苦(身心よる欲望の苦しみ)によって、苦悩に満ちた日々の世界で生活している。禅師は、これらは常に刹那生滅していると述べられている。

禅師が本文で引用する、刹那生滅の教えの出典は、部派仏教の『倶舎論』からである。入一弾指のあいだに、親指と中指で一音鳴らすあいだに、六十五回生滅するという。そして、二十四時間のあいだに、六十五億九万九千九百八十も起滅するとも示されている。

現代の時間で計算すると　「一日は六百の四十八万刹那となり、現代の時間では一刹那は１／７５　(約〇，〇一三秒)」(星俊道「道元禅師における宗教的時間の特質」『駒沢大学仏教学部論集第二十三号』(平成四年十月)　である。

亦、星氏は論文の中で、「二螺旋　道元禅師の時間概念の特徴をもう一つ挙げるとすると、『行持』に、仏祖の大道、かならず無上行持あり、道環して断絶せず。発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり。と説かれているこの「行持道環」ということになるかと思われる。ただ、注意しなければならないのは、この〝環〟が単純な円ではなく、螺旋構造を有している点である。」と刹那生滅と行持道環とが、螺旋構造を有していることを論じている。

このように、刹那生滅時間と禅師の行持道環の教えが連関しているのではないかと考える。

１　円環時間と三つの時間(独楽の回転)

刹那生滅論の教えを、円融三諦と三つの時間とをリンクさせながら明らかにしてみよう。三つの時間とは、一、凡夫の時間である。禅師が有時の中でのべる十二時のことであり、二十四時間ことである。二、刹那生滅する時間のこと。刹那に七十五回起滅する極微超高速時間である。そして、静止の不滅の時間である。これらの三つの時間が円融し円転する時間が行持道環の世界なのである。

三つの時間を独楽の回転の喩で説明してみる。独楽はお椀の形をした木地本体と、彩色した絵模様・心軸・回転・軸点で構成されている。凡夫の時間とは、木地本体(身)と絵模様(心)と本体の回転(凡夫の時間)の三つで成立している。刹那生滅は心軸の回転(刹那生滅時間)のことである。そして、静止の時間が軸心点(不滅)のことだ。

私たちは独楽全体を見るとき、離れた視点から観察する。そして離れた位置から独楽をみると、高速回転していることに気がつかない。其のため、身の独楽本体と彩色された絵模様である心によって、自己は実在するものと信じる。

其れに対し、禅師の仏の時間は独楽を近くからみた観点なのだ。木地本体と絵模様の回転が十二時の時間の進行、軸心の回転が刹那生滅時間の進行、そして、軸心点が静止時間である。これらが、同時に回転し進行するのである。円融三諦で説けば、十二時の進行が仮、静止時間が空、そして、中とは中諦のことである。三つの時間が円融し同時に高速回転したのが、刹那生滅時間論なのである。

「全機」・「都機」両巻で、刹那生滅時間を明らかにしてみよう。全機巻では、自己の舟全体の時は「舟の世界にあらざることなし。天も水も岸もみな舟の時節となれり」。そして、都機巻では「雲駛月運舟行岸移」、「雲と月と同時同道して同歩同運すること、起止にあらず、流転にあらず。前後にあらず。舟と岸と、同時同道して同歩同運しること、起止あらず、流転にあらず」と禅師は説かれている。

禅師は、舟(独楽)である、自己全体(有)の時節(時)のとき、三つの時間が円融し、刹那生滅全体は、月(軸心点・静止)と舟(身・本体)・雲(心・絵模様)・天・水・岸(全宇宙)と駛・運・行・移(回転、時間進行)は、同時(円融時間・)同道(同諦・証)同歩(起滅・全機・全滅)同運(運動行持・道環進行)であることを明らかにしている。

身心脱落した自己全体の時節は、起にあらず、止あらず、流転にあらず、前と後にあらずと述べられている。ようするに、垂直正中線上〈永遠〉(月・舟・雲・天・水・岸・駛・運・行・移)に円融し、同時・同道・同歩・同運し、そして、無限線上(永遠時・時間超越・脱落)の時間の過去と未来の前後が際断され脱落しているのだ。このような境地を禅師は前後際断と説くのである。

当に仏の悟りの世界から、自己（舟・独楽全体）の存在を観るときは、三つの時間の回転と進行(起滅)と天水岸(全宇宙)と運行移は同時同道同歩である。そして、自己全体が回転と進行と起滅する時節は、自己が全宇宙そのものゆえに、全宇宙が前後際断し円環しているのだ。

禅師は全宇宙が円転する自己を、眼蔵第十六巻行持　上「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり」とこの様に述べている。

また、有時の巻では「丈六金身をもて丈六金身するを、発心・修行・菩提・涅槃と現成する、有なり時なり。尽時を尽有と究尽するのみ」と説かれている。丈六金身とは一切を解脱した仏の境地のことである。教・行・証も脱落した現成が、有時の有であり、時である。尽時（蓋時）が尽有を蔵身してしまうことが、一切を解脱することを究め尽くすと云う。

このように、行持の行とは修行、持とは保つことである。仏祖の偉大な教えを永遠に行持することが、行持道環である。有時の巻では、解脱した仏の現れた全体が蓋時である。尽時のことである。時の道環が蓋時である。仏性の道環が有仏性、無仏性等々である。

『聞書』は道環をこのように説かれている。「道環して断絶せずと云ウは教・行・証ノ一なる道理を道環と云ウベし」そして、発心の時、修行の時と覚りの境地は各オノ別ナル二アラザルを道環と云ウベし、と説示している。

亦、『抄』は第六行仏威儀巻で「道環とは、袈裟の環は、すべて始めも終りもなきも

のナリ。(中略)無始無終なる事に仕つけたるなり」と述べている。道環とは、禅宗の僧侶が絡子(らくす)に付いている環佩(かんばい)の円環のようであり、そして、円の回転は、始めもなく、終わりもない、世界だと明らかにしている。

道元はこの様な境地を、弁道話「修証はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道の見なり。仏法には、修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆゑに、初心の辦道すはち本証の全体なり」、発心と修行(始覚法門・因・妙修)と菩提(悟りの心)と涅槃(解脱地・証・果・証上・本覚法門)は一体である。身心脱落した境地なのだから、始覚法門から云えば妙修、無始無終の本覚法門から説けば証上である。道環とは、発心即修行即菩提即涅槃が一体蔵身した境地であり、証上妙修・円因満果とも説かれている。

2　有時の円環時間論(行持道環)

そして、当に禅師から円環する時間の世界を観るとき、自己全体が有時高々峯頂立・有時深々海底行であり、この尽界の頭々物々を時々なりと覷見すべしである。仏の悟りの心だけではなく、凡夫の心の半有時も・錯有時も、錯々有時も、すべてが、蓋時であり、仏の時間であり、森羅万象が蓋時の現成そのものである。時の蓋時・時の蓋時が宇宙を蓋いつくし全機現しているのだ。有時の巻を学ぶ基本観点である。

第二編では、第一篇で明らかになった身心脱落の体験と、仏の正法眼の観点をもとに、有時の宗教的時間の世界を具体的に明らかにする。